

泥・水・砂あそびから子どもたちが得るもの

富岡美織

北海道・北の星東札幌保育園園長

人間にとっての〈あそび〉の大切さ

日々子どもたちと接する中で、幼児期の子どもたちにとっては生活のすべてが「あそび」といつても過言ではないと感じることが多々あります。子どもたちは手を洗うことや着替えることもあそんでるように楽しんでいきます。パンツの足を入れる穴をトンネルに見立て着替えをしたり、石鹸のブクブクの作り方を競い合ったり、どの行為にも発見や工夫があります。そして時に仲間との関わりの中で大人も予想できないような、みんなをあつと言わせるあそびを考えることがあります。

しかし現代は子どもらしい自由な発想が生まれづらい世の中になってしまったようです。子どもの育ちに大切な〈時間〉〈仲間〉〈空間〉の三間が無くなったと言われ

て久しい状況です。また今では0歳児からメディアに関わる機会が増え、ますます人との関わりが少なくなってきました。「早期」「詰込み」といった教育問題も途絶えることなく押し寄せてきて、子どもたちはどんな「あそび」たくてもあそべない」という世界に追いやられているように感じます。

それでも子どもたちは今日もあそび続けます。そしてあそびの中から自ら発見を繰り返しています。その発見こそがこれからの生き続ける子どもたちの人生の土台を創っているのだと感じています。

たくさん抱えながらも「二度とない子ども時代をこどもらしく生きてほしい」という願いを柱に職員一同、実践に！学びに！と奮闘しています。

あそびで大事にしていること

こどもはあそびを通して様々なことを学んでいます。ことに経験値の低い子どもたちには知識を得る＝頭で知ることよりも、実体験＝自分の身体を通して分かることが大切だと思います。「優しい子になりなさい」と言葉で諭されて優しい子になれるほど人間は簡単なものではないようです。人との関わりの中で実際に心が動かされて「思いやり」が生まれるのだと思います。そういった意味では「ケンカするほど仲が良い」という言葉の深さも領けます。ケンカも出来なきゃ本当の友だちは作れないものなのかもしれません。

あそびでとりわけ大事にしていることに〈可塑性〉があります。幼児期に使う玩具や教材を考える時に〈可塑性〉をととても大切なキーワードの一つと考えています。子どもにとっての玩具はそれを使って「大人しくさせる」ものではありません。座ってじつとさせるものでもありません。ですから、玩具は使いますが、それを使うことによつて頭も身体も心も動かされるものであってほしいと思います。ですから見学にきた方が「おもちゃは使わないのですか？」と質問されるくらい当園は玩具が少ないようです。

人間は他の動物よりも環境に影響を受けやすいといわれます。その意味するところは生まれる前の遺伝の力だけでなく、生まれてからの環境の力も大きく影響するということであり、どんなに弱さがあっても育つ可能性があるということです。ですからこどもが育つ環境は大事です。人との関わりが薄くなっている現代にあつては、まず人的環境である保育士や仲間との関わりがあつて、そこに玩具がちよつとしたエッセンスになったり、「ごっこ」の世界の仲間役になったりというような捉えでいます。

園庭という環境を通してこどもが育つ

水・砂・泥あそびを通して子どもたちの心と身体を育てるといふことは簡単なことではありません。一日を通して一年を通して6年間を通して、どのように水に親しみ土を踏み泥に触れていくかを、職員集団が真剣に考え合い実践していかなければ、こどもの育ちにまでは影響していかないと思っています。

当園の園庭の環境は次の通りです。

*砂場の囲いはなく園庭全体が砂場です。子どもたちは自由に水と砂を運びあそびを展開していきます。

*砂は海砂を使用し、約3年に1度の割合で入れ替えます。

写真3



写真1 (上) / 2 (下)



古い砂を小型のブルドーザーを入れて廃棄し、新しい砂をトラック2台分入れます。

*水道の蛇口は18か所設置しています。

*夏のプールは4か所設置します。北海道の夏は短いので7月・8月の2か月しか遊べません。毎日清掃をして毎日水を入れ替えます。

*園庭あそびの道具もプラスチック製品は使わずに、本物の鍋やボール・バケツ・剣先スコップなどを使用しています。

*シャワー2か所と園内にお風呂を完備しています。たくさん汚してあそびきれいに身体を洗って食事をしま

す。そのメリハリを大事にしています。

園庭全体であそびが深まりひろがる

園庭に砂場のくくりはありません。どこで水を流しても、どこで山を作っても穴を掘ってもかまいません。18か所ある水道の蛇口から、泥あそびに欠かせない水をふんだんに使って遊びます。また保育士はどのようにあそぶかという計画は持っていますが、こどもに強制することはありません。こどもたちは一人ひとり自分の感覚であそびに入ってきたり、仲間とあそびを作り出したり、一人で黙々とあそんでいます。保育士はその姿を大事にしながら、砂の感触を嫌がる子や人との関わりを避けてしまう子、なかなかあそび込めない子などを気にかけてさりげなく援助をするようにしています。

毎年5月の連休明けの日曜日に5歳児の親子交流会を催し、4か月雪の下で固まってしまった土を親子で掘り起こす作業をしてもらい、大きな砂の山をいくつも作り「園庭開き」を迎えます。もちろん雪が少し溶けてくるとすぐにこどもたちは土を見つけて泥だらけになります。この交流会での恒例の土起こしを迎えると、いよいよ本格的な北海道の泥あそびが始まります。黒い土が顔

を出し外の水道に水が流れる日がかかることは、真っ白な雪の世界で4か月過ごすこどもたちにとっては、全身の感覚を持つて春を感じることもありません。

遠くに見えている築山(写真3・4)は園舎改築(約20年前)の時に作ったものですが、こどもたちはこの築山をスコップで壊し始めました。こどもたちは作るよりも壊すことを好む時期が長くありますが、この築山を壊し始める中から粘土状の土が出てきて、この予期しなかった粘土の発掘がまたこどもたちの好奇心を駆り立て、何時間も何日もかけて粘土の発掘に夢中になっていました。もちろん業者がきちんと作った築山ですから、こどもの力で掘ることとは容易なことではありません。こどもたちは剣先スコップを使い、腰を入れて力の限り黙々と掘っていききました。園庭はこの築山以外は平らな形状でした。しかし今では写真の通り常に凸凹していますがこれは全てこどもたちがスコップで作った起伏です。毎日こどもたちのあそびによって形を変化させていきます。一日たりとも同じ形状がない危ないこと以外はやってはいけないことのない園庭です。保育園の関係者以外の方によく「園庭は工事中ですか?」と尋ねられることが多くあり、苦笑しながらもこどもたちの力強さを誇りにも思います。

写真6



を絞り、仲間と言葉で！アイコンタクトで！共同作業を続けます。(写真6)

その大きな子たちのあそびの横で小さな子たちもあそんでいます。じつと大きな子たちの様子を見ている子もいれば、川の水を引っ張ってきて自分たちのあそびに使う子やあそびに入っている訳ではありませんが同じ川であそんでいる子もいます。当園の特徴ですが常に憧れの存在である年長児との交流が自然とできていること、そのことは幼い子にとって憧れを抱いて育つていけることにつながっています。大きくなること、生きていくことに憧れて育つていくということにつながっています。

ドキドキ…そしてワクワク

二度とないこども時代に「ワクワクドキドキ」する実体験を通してこどもたちの心が動かされます。その心の動き、「情動」こそが人間としての感性を育ててくれるのでしょうか。

何故、こんなにもこどもは水を求めるのでしょうか。お母さんのお腹の中で羊水に包まれてヒトとなってきた私たち人間は、幼い子ほど水を求めます。こどもをよく観察していると、這い這いの時期のこどもも水の音が聞

写真4(上) / 5(下)

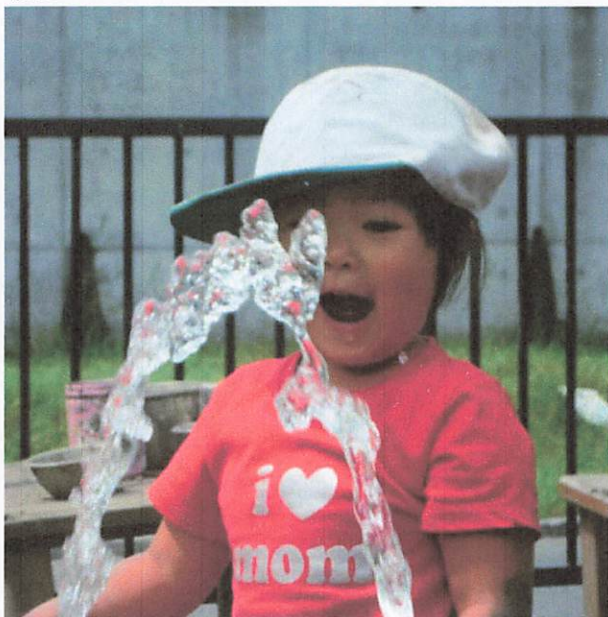


水が人間関係をつくって変えていく

水は傾斜を流れていきます。この築山の傾斜を使って4歳児や5歳児は大掛かりなダムづくりを繰り広げます。剣先スコップでダムから流れる川を掘る子、そして川には欠かせない水を水道から20ℓのバケツで何度も運ぶ子、それぞれが役割分担をしながら一つのあそびを完成させていきます。半日をかけて：昼食・午睡をはさんで夕方も：、さらに次の日も：と続く日もあります。こうしてこどもたちは頭の中に描いた設計図を仲間と共有し、全身の力を使ってあそび込んでいきます。しかも描いた設計図を微調整し

ながら、「もつとこうした方がいい」という、より良い方向にあそびを展開していく力を高めていきます。まさに〈可塑性〉のある土と水であるからこそ、調整して作っていく臨機応変さが楽しみを膨らませるのだと思います。

こどもたちが作った山の頂上に穴を開けその上にタイヤを積み、さらに深く見立てたその穴に溢れるまで水を汲んで入れていきます。溢れた水が山から流れ川になっていきますが、水を流しているうちに、水を流すチームとそれをくい止めて水を流れさせないチームに分かれ、どちらが勝利するかを競い合うあそびが始まります。20ℓのバケツは決壊チームには水を運ぶ道具、阻止チームには土を運ぶ道具になっていきます。こどもたちは瞬時に自分がどちらのチームに所属しているのかを判断します。途中で「止めるチームが少ないから○○君はこっこのチームに入つて」と調整が入ることもあります。こどもたちは夢中になりながらも、時に全体を把握しながらあそびは続いていきます。俄然本気になっていくのは阻止するチームで、板を集めてきて水の勢いに板の大きさを合わせて設置します。ものを運ぶ道具であったはずのバケツも今度は水をくい止めるために使います。水はどんどん流れてきて、瞬時にどうするかを判断しなくてはなりません。こどもたちは知恵



まだあります！泥んこ遊びの効果
①心を育みます
水や泥の感触はリラクゼーション効果があり、快・不快の感覚も育てます。自分で作るあそびには多くの発見があります。考えてみて！やってみて！失敗してきて！成功していく。そんな心の動きが子どもたちの心に毎日



こえると自ら這って水のある方へ進みます。子どもが水を求めることはとても「自然」なことなのです。人間形成の土台の時期に「自然」のものに触れて育つこと、四季を感じて育つことが子どもたちの感性ばかりではなく、逞しい心と身体を育てるのだと思います。バーチャルではなく実体験を通して！頭ではなく身体を通して！分かっていくことが大事な時代です。感触を楽しんで！

可塑性とイメージ力

車のおもちゃは車ではないのですが、例えば積み木ならイメージすることによって、車にも家にも人にもなりま

す。砂も水の混ぜ方によって、お団子にもケーキにも、山にも川にもダムにもなります。特に砂や水は「自然物」ですから、私たちが何かを働き掛けない限りは、そこに存在しているだけです。その自然物である砂や水を使って、何も無い状態から様々なものを創り上げていくあそびは、子どもたちのイメージ力を育てます。

- ①先を読む力くこうしたらこうなっちゃうかも？
- ②計画する力くこういう風にしたらいからこうしよう！
- ③次に生かす力く失敗を成功のもとに出来る力

そしてなによりもイメージ力は「人の痛みが分かる」力につながっていくように思います。子どもたちに人の痛みが分かる子に育ってほしいと願っています。現代はほとんど人との関わりが持てない世の中になってきています。そしてそれはもう新生児の時代から始まっています。紙オムツが普及し、生まれた直後から養育者との交流が減り、メディアの問題もどんどん低年齢化の一途を辿っています。世の中が便利になり、子育てが楽になることは大いに喜ばれることではありますが、その陰に潜んでいる問題も考えていかなければなりません。

おこります。

②身体を作ります

とにかく自分の知恵と身体を使わなければ、何も生まれません！重いスコップを使い、水のたっぷり入ったバケツを運びます。水を入れる穴をあえて遠くに作るなど、日常的に力を使うことを考えています。



写真10 (上) / 11 (中) / 12 (下)

③人との関わりを育てます

仲間と協力すればするほどダイナミックなあそびに発展していきます。構想から発展へ！自分の頭で描いたものを自分で！仲間と！形にいきます。その繰り返しが「また明日あそぼうね」と人との明日を創っている力になるのではないのでしょうか？

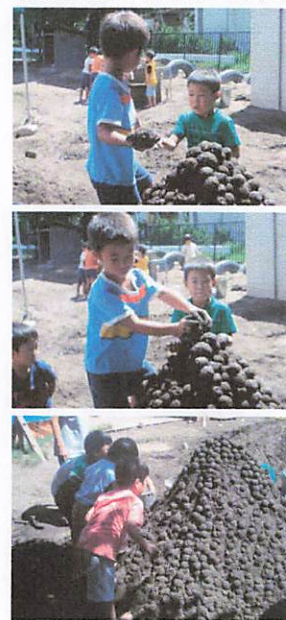


移りかわり」を実体験して育ちます。「花が咲き散って何も無くなりまた芽吹いてくる」その「自然」を眼に焼き付け胸に刻んで育ちます。人生の中で苦しいことがあっても「またきつと春が来る」「またきつと良い時が来る」ことを信じられるようになるのだと思います。そのことを知識ではなく身体で知っている子は、生きものと

してイキイキと生きていくのだと思います。

石井桃子さんの「子どもたちよ 子ども時代をしつかり楽しんでください おとなになってから 老人になつてから あなたを支えてくれるのは子ども時代の〈あなた〉です」という言葉が胸に響きます。私たちは子ども

たちにしっかりと子ども時代を保障出来ているだろうか？
大人に振り回されて、二度とない子ども時代をこどもらしく過ごせない子どもたちが多いように感じられてならない現代ですが、自然とともに生きてきた子は、挫けてもまた必ず前を向いて歩んでくれることでしょう。苦しいことが起こらない人生を保障してあげられないのなら、せめて遅く育ててあげたい。それが私たちの一番の願いです。



④ 集中力が育ちます

その子によってやりたいあそびを見つかる時間は違います。なんでもすぐに飛びついてあそぶ子もいれば、じっくりと見て回って決める子。転々としながら最終的に一所に落ち着く子と様々です。ですから一日の活動を細々と区切らないようにしています。あそび出すことに時間がかかる子にも時間的保障が出来るように、午前中は朝から昼食まで思う存分時間を使います。

多様な遊び方があり「これがしたい」と自分の心が動くあそびが出来る！自分のやりたいことだから集中しないわけがない！という生活をしています。保育士は切り上げさせるのが大変なくらいです！

⑤ 人間らしい豊かな感性が育ちます

自然物であそぶことは、ヒトが人間になるために必要です。自分の身体を使って、自分の皮膚を通して感じる事が、感性を育てていきます。季節によって水の冷たさも違い、自分が求める気持ちも違います。水・砂・泥の感触を手で！足の裏で！身体で！日々感じながら子どもたちは感性を磨いていきます。

自然の中の経験が人生の根っこに

自然の中で多くの時間を過ごしたこどもは「季節の

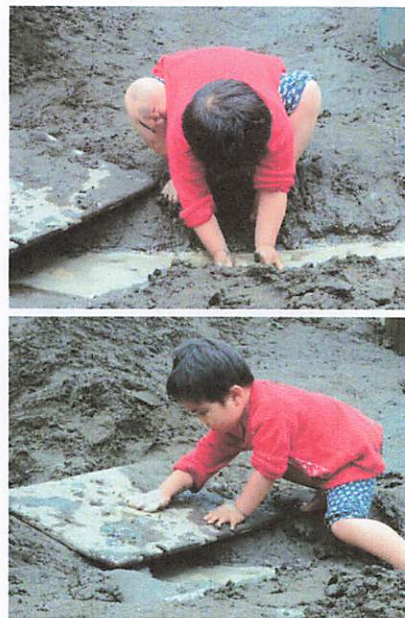


写真16 (上) / 17 (下)

【希望の根っこ】 第46回

先月2月号の保育園の園庭全体を使った「泥・水・砂あそび」の実践を『希望をつむぐ教育』の実践群の中に位置づけてみると、生活教育実践の根っこ、〈胎芽的社会（オキュペーションズ）〉になっている。社会に連続させて考えてみると、土木工事・治水工事の原型であり、小学校での流水、雲のでき方などの学びを経由して、自然災害の原理と対策に行き着く。泥や赤土で水が濁ったままである経験は、海の埋め立てがどれほど海を汚すか、リアルに感じる力になる。この土山に、草が生えてくる。あるいは花やイネなど植えてみたくならな
いか。花を植えることは、吉野実践のアサガオを経由し、花で町おこしをする徳水実践につながる。また、谷保実践の「田んぼ」に連続していく。そのような屋外での作業に疲れたら、屋内で絵を描いたりお話しをしたり、歌を歌ったり、劇をした



り、そしてものをつくったりの文化活動が展開する。これは和光中学校が行く、〈秋田の生活〉の原型ではないか。俳句がつながると、石川実践になる。自由民権運動の時は、農作業の終わったあとの時間で、ルソーの『民約論』を読み合わせたり、憲法草案を話し合ったりしていた。これは村越実践の根っこになつていないだろうか。どこからともなく水をせき止める板を持つてくる力は、 ∞ の筆算で、2から8は引けないから、必要なものをどこか別の位に探しにいく力の根っここの経験ではないだろうか。
可塑性かそせいのある土は完全に思い通りになるわけではなく、そこに法則の理解、工夫、思考が生じる。変える経験は、世界やルール、社会も土のように可塑的で、変えられるものだという確信を育む。それがしなやかでたくましい可塑的なところを育む。デュローイ『民主主義と教育』第4章の具体例になっている。 (研究部・加藤聡一)